

有機農業に対する経営研究の視点

高橋 太一

(東北農業試験場)

A Point of View in Farm Management Study For Organic Farming

Taichi TAKAHASHI

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

今日有機農業と有機農畜産物に対する関心・要求は社会的広がりを見せている。有機農業は、食糧の安全性と質、農業生産の安定性ならびに恒久的農業再生産の確保等から、今後の農業生産における重要な生産方法と考えられている。しかしながら有機農業に関しては、社会的評価研究にとどまり、経営・経済的評価及び新たな生産流通システムとしての意義等に関し、科学的に社会的生産に関する分析検討が行われていないのが現状である。

有機農業生産が実践に行っている問題提起は、農畜産物の生産・流通・消費の各場面から科学的に検討する必要がある。これまでの経営・経済的評価の視点は、生産性と利潤極大化に重点が置かれ、この二つの評価基準からはずれるものを問題にすること自体が極端に少なかった。今日この二つの基準を優先する余りに、これらの指標による社会経済的評価と生産活動の矛盾が大きな問題になってきている。ここではこのような状況のもとにおける有機農業研究の分析視点の提起を行い、今後の研究に一定の方向を示唆する。

2 有機農業分析の視点

ここでは有機農業を、生産者・消費者双方の生産方法・技術に対する見解・適用の程度によって定義する。有機農業を生産方法の科学的定量性によって区別することは、現在の段階では困難であるので、図1に示したように、いくつかの技術の使用に対する定性的な把握を行なうことにより、有機農業を定義する。図1は左側によればほど、有機農業的になり、有機農業と対極にある生産技術に基づくものを化学農法として位置づけている。また定性的把握を行う場合、自然農法、生態系農法と呼ばれるものも、その性質から有機農業に含めて検討していることから、「安全性と農業生産の恒久的再生産を第一義とし、有機的生産手段を重視する農業生産」を、ここでは有機農業と呼ぶことにする。

近年の有機農業への関心は、日本農業がおかれている社会的経済的状況に密接に関連している。戦後の農業生産における重要な経営・経済的評価指標は、第一に生産量、第二に生産性、第三に利潤極大化に集約されるが、このうち第一の生産量に関しては、生産量そのものが単独で問題に

	有機農業<----->化学農業	
生産性	とらわれない-----生産費補償-----	最重要
農薬	ゼロ-----消防車の使用-----	不安有り-----心配無し
化学肥料	ゼロ-----	必要に応じて-----100%
堆肥	ゼロ-----	重要視-----ゼロ
輪作	重要視-----	2次的

図1 有機農業と化学農業の特性

されることは、現在ほとんどないといってよい。現在は、第二の生産性の向上が第三の利潤極大化に結びつくという道筋で捉えられ、この二つの指標の関連が最も重要視されている。しかしながら、近年生産現場における生産技術と消費のあり方に対して問題提起がなされ、その問題克服の方策として有機農業が存在しているという現象が大きな注目を集めている。このような現象のもとでは、前述の三点に拘束されない評価基準の策定と、その評価基準による有機農業の分析・検討が必要となる。

有機農業が端的に提起する問題を指標として捉えれば、第一は農業の再生産の持続性であり、第二に生産と生産物の安全性であろう。具体的問題の様々な事象も、この二点に集約できると考えられる。第一の指標は、従来も経営問題とされており、経営論では重要な指標になっているが、現実の生産現場では、水田そのものが地力維持に重要な役割を果たすことも手伝い軽視されてきた面があり、改めて提起される必要がある。この指標は農業に限らず、人間と人間社会の再生産と、そのために必要な環境の再生産という意味から捉え直す必要がある。これに関連して、農業が産業としての役割を持ち続け、社会全体の再生産に重要な位置を占めることを考えた場合、この再生産の過程が生産と生産物=消費物の安全性を確保していなければならない。これが第二の指標となるのである。

3 経営研究における有機農業の問題点

有機農業の分析・検討において、農業経営のレベルで問題となる点は、以下の諸点にあると考えられるが、先の二つの基本的指標をもとにしてこれらの問題を検討する。

- ① 農業の個別生産現場の再生産と持続性の確保
- ② 農業生産現場における生産者自身と生産物の安全性
- ③ 農業生産の生産性
- ④ 農業生産の安定性と収益性
- ⑤ 生産物の質による差別化の成立の可能性と収益の増大

⑥農業生産資材等の節約と適正な使用による生産技術の変化

⑦農業生産技術による生産者の疎外

第一点に関して、有機農業は農業再生産の維持を第一義とすることによりこの問題を克服しており、経営の戦略的目標と生産技術の調和の問題を提起している。

第二には安全性の問題である。この問題は生産物の質という点だけでなく、生産そのものの安全性、生産主体である農民の生産現場の安全性の問題である。

化学的生産手段の使用で、現在最も問題とされているのは農薬の使用である。表1に示したように、米生産における単位生産量当たりの農薬使用量は、昭和45年を100として昭和60年には335%という値となっている。昭和40年代前半に水銀系、BHC等の強毒性の農薬の使用が禁止になり、弱毒性の農薬が使用されるようになったが、使用量が増加している状態では、単位面積当たり・単位生産量当たりの毒性物質の投入、農薬の生産構造に占める役割が定性的には変化していないといえる。この傾向は米生産だけではなく、日本農業の全般的傾向であることも、表1からみられるのである。

第三、第四の点は、有機農業における労働、資本、土地等の生産性の検討であるが、有機農畜産物に対する、市場

表1 農薬の使用量算出表

	10 a 当 り 薬 剤 費 (1)	60 kg 当 り 薬 剤 費 (2)	60 薬 剤 費 当 変 化 率 (3)	薬 剤 価 格 変 化 率 (4)	生産物当り薬剤 使用量変化率		
					米 (5)	キ ュ ウ リ (6)	ミ カ ン (7)
昭和45年	1118	152	100	100.0	100	100	84
46	1157	169	111	100.5	110	94	93
47	1167	154	101	102.1	99	112	109
48	2119	271	178	108.2	165	104	80
49	3089	407	268	133.6	201	117	162
50	4106	512	337	151.6	222	135	179
51	4609	648	426	156.9	272	126	180
52	4857	610	401	161.4	248	100	192
53	5308	638	420	163.5	257	114	208
54	5540	690	454	163.3	278	137	215
55	6082	886	583	173.9	335	135	245
56	6606	875	576	180.5	319	146	258
57	6705	878	578	180.3	321	151	267
58	7309	955	628	178.2	352	140	274
59	7133	828	545	178.1	306	161	263
60	7580	908	597	178.2	335	150	240

出所：(1)米生産費調査より (2)=(1)/単収×60
(3)=(2)/152×100 (4)=農村物価賃金統計より
(5)=(3)/(4)×100 (6)野菜生産費調査より計算
(7)果実生産費調査より計算

表2 卸売市場・産直価格対応表

	年	昭和60年										昭和61年		
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
カンショ	市場	195	228	174	320	152	186	180	178	197	217	192	234	
	産直	255	255	255	255	255	255	220	220	220	220	255	—	
キャベツ	市場	84	63	74	146	—	—	45	30	44	116	115	107	
	産直	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	
ゴボウ	市場	69	—	—	—	202	207	130	141	193	189	196	229	
	産直	330	330	330	330	330	330	330	330	330	330	330	330	
コマツナ	市場	295	162	280	447	280	328	195	138	119	214	299	166	
	産直	273	273	273	273	273	273	308	308	308	308	308	308	
ナス	市場	490	299	317	366	119	147	102	—	—	—	—	—	
	産直	—	—	250	250	190	190	—	—	—	—	—	—	
ニンジン	市場	62	112	56	64	—	—	130	91	75	81	115	165	
	産直	165	165	165	165	165	165	—	110	110	110	132	132	
ナガネギ	市場	93	150	141	247	211	299	254	264	234	205	238	323	
	産直	210	210	210	210	210	210	165	143	143	143	143	165	

注. 上段：神田中央卸売市場卸売価格（卸売市場統計年報より）
下段：千葉県産直有機農業生産農家手取り価格（聞取り調査より）

評価が確立していない段階では、産地直結などにより流通手段を内部化し、消費者と提携することによって有機農業生産の経済的再生産を確立している例が多い。表2は産直による価格の事例であるが、市場価格に比較して農民の手取り価格である産直価格が、相対的に高価安定しているのが見て取れる。また有機農業生産は社会的経済的条件と主体の取り組みに大きく左右されることを念頭に置いて、第五の市場における有機農産物の評価確立と収益の増大の可

能性が検討されなければならない。さらに生産技術のあり方が有機農業への見解・理念等だけでなく、農業経営上の経営目標との関わりで規定されてくることにより、第六の点の研究が必要になるのである。

最後に第七の点として、農業生産技術の巨大化、精緻化が、生産主体である農民との関係をほとんど省みられない中で進められている。このことによる矛盾と問題を把握し、この研究に取り組む必要性がある。